

EurekaXIII

六年制通信 No.28 令和7年12月5日(金)号

失敗は前進している証拠

最近4年生と6年生の授業に行っているのですが、たびたび席替えをしているのを見かけます。席替えかぁ、私が高校生の頃はどのくらいの頻度でしていたのか忘れましたが、楽しみでしたね、確かに。でも、君たちも高校を出たらもうほとんど経験しないのしょうね。私たちも職員室の座席移動がありますが、あれは席替えというより人事異動ですからね。君たちにとって今だけの経験は、けっこうあるのかもね。

六年制は6年間も同じ空間にいますので仲間意識も強いことでしょう。面白いものですよね。ほんの30人ほどしかない空間で毎日何時間も過ごすのですから。だからこそ自分のクラスを大切にしてほしいですね。このクラスで授業を受けられる幸せを感じてほしいと思います。コロナ禍以来、普通に登校して普通にクラスの席に座り授業を受ける、それが当たり前ではないのだということを、つまりそんな日常は文字通り「有り難いこと」なのだという事を私たちは知りました。君たちは、だから一層授業を大切にしないといけませんね。先生方もですけど。教室にはリモート授業にはない、丁度電子書籍と紙の本の違いのような「テクスチャー texture：手触り」があると思います。何のことか、少し考えてみて下さい。

英語では「クラス」だけではなく「授業」のこともclassと言いますが、この語の語源を少し見てみましょうか。現代の辞書にはこうあります。class：(学校の)クラス、(船などの)等級、(社会的)階級、授業。面白いのは俗語として「気品」とか「エレガンス」、「優秀性」とあり、例文としてThere's a lot of class about her. (彼女はとても気品がある)が挙げられています。知りませんでした。

語源辞典には一番に「艦隊」と書いてあります。ちょっと驚きますね。16世紀に入るところに、イギリスでは学者など教養のある人々の間に古典ブームが起こります。つまり、ギリシアやローマの文学作品に強い関心を示すようになるのですね。ギリシア・ローマは西洋文学の源流ですからむしろ遅すぎる気もしますが、とにかく読み出してみるとギリシア語やラテン語の難解な用語がものすごくあるわけです。そしてそれらが一気に英語になだれ込むようになります。こういう難解な借用語をinkhorn terms (インク壺の言葉)と言い、当時は日常では全く使うことのない語として批判的になりました。手元の研究社の大事典にはinkhorn terms (word, language)：学者(学生)言葉《生かじりの外来語や難しい語句》とあります。おしゃれな表現ですね。

しかし、学者以外でも古典文学を求める人々がいるのも事実で、そうなると批判しているだけではダメで、むしろ難語を解説してくれる辞書が欲しくなるわけです。ち

なみにジョンソン博士の『英語辞典』の完成は1755年ですから、18世紀になってようやくイギリスは自国の言葉の辞書を持つことになります。

さて、トマス・ブラント (Thomas Blount, 1618-1679) の編纂した語彙集『グロッソグラフィア』(Glossographia, 1656) が 'class' の初出で、1656年に「艦隊」、「部類、等級」のち「社会的階級」の意味になり、「同級生 class mate」が1713年、「教室 class room」が1870年です。class room より class mateの方が早いとは、少し違和感を覚えますが、「同級生」は学校以外でも考えられるからでしょうかね。

語源はこのへんにして、教室の中で気をつけてほしいことがあります。授業に主体的に参加する意欲を持つことは当然ですが、失敗を嫌がらないでほしいのです。当てられるのを嫌がる生徒もいるでしょうが、いやいや勿体ない。答えるチャンスをもたらしたのですから喜んでほしい。間違えてもいいのです。君が間違えることがクラスメイトの勉強になります。君が正解することもクラスメイトの勉強になります。そして何よりも君自身の勉強になります。答えないと失敗しない、ように見えるかもしれませんが、それで得られる安心などクラスでは不要です。むしろ大切な経験を放棄していると考えた方がいいと思います。教室にリンゲルマン効果を持ち込んではいけません。誰かが答えるだろう、というのは自分の進歩を阻む考えです。質問に対する正解は誰かが答えるかもしれませんが、しかし、自分で考えて出した答えは自分で答えなければダメなのです。それが間違っているても何の問題ありません。間違ったら恥ずかしいという心理も教室では無用です。「失敗は前進している証拠」だと断言していいと思います。ですから諸君、「真面目に」失敗したまえ。

今週のおすすめ

・知念実希人 『硝子の塔の殺人』 (実業之日本社文庫)

560 ページ一気読み、との触れ込み。その通りでした。これは古今東西歴代のミステリー作家へのオマージュとも言えますね。推理マニアの蘊蓄が随所にちりばめられていますから、好きな人にはたまらないでしょうな。

硝子の館に集められた刑事、料理人、医師、名探偵、メイド、霊能力者、小説家、編集者、執事、それに館の主人、この十人が登場人物。いきなり館の主人が毒殺されます。犯人も、その手口も読者に示されます。しかし、連続殺人が起こったのをいいことにその犯人は名探偵の手足、即ちシャーロック・ホームズで言えばワトソン役になりおおせて二人で「真」犯人を捜し始めます。密室につぐ密室で、謎は深まるばかりです。また十年以上も前の事件が関係しているかもしれないとわかり、皆で検討するのですが全く犯行の手掛かりもなし。しかし自称名探偵（探偵ではなく名探偵ね）の碧月夜とワトソン役の医師一条遊馬はついに犯人を絞り込みます。ここからが実はこの本の真骨頂なのです。読者に対する古典的な挑戦状があるのですが、名探偵の大団円を読むにはまだかなりページが残っているなど気づくはず。案の定ここから、二転三転のどんでん返しが用意されています。いやあ、面白かったよ。

BGM は 高中正義 の *Blue Lagoon* でした…。